
晶と祐希の午後

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

晶と祐希の午後

【コード】

N5500C

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

暇つぶしにクッキーを焼いた晶は、恋人の祐希を午後のお茶に誘う。それだけの、短編。

『全編に渡って巧妙に仕掛けられた叙述トリック、君は見破ることが出来るか！』ベストセラー間違いなし、この夏イチオシの一冊』

「てゆうか、叙述トリックって言うっちゃってるし」

狭苦しいワンルームマンションの中で、一際スペースを取る二人がけのソファに腰掛け、開いていた雑誌の広告を見て、晶は眉をひそめた。どうやら売る気は無いらしい。

晴れた日、休日の後。朝から洗濯、掃除と動き回っていた晶は、この時間になってやっと落ち着いていた。一人暮らしも四年目を迎えるとすっかり慣れ、始めは心配事の多かった事など忘れたかのように、楽しんで暮らしていた。

弱めに設定してあるクーラーの風が心地よい。外は今日も強い日差しが降り注いでいた。洗濯物を干すときにベランダに出たが、尋常じゃない暑さとけたたましいセミの声に参ってしまった。

広告に興ざめして、晶は雑誌を閉じた。ソファの前においてある、丈の低い木製のテーブルにその雑誌を置いて、一つ小さく伸びをする。

改めて今からの時間、何をすべきか考えることにした。部屋を見回せば簡単に目に付く幾つかの物。やりかけのゲーム、書きかけの小説、読みかけの本。いろいろとできる事はある。しかし、どうにも食指が動かなかった。せつかくの休日だから、時間を気にせずにできること。でも、外に出るのは真っ平御免。

二十分ほど悩んだ末に、晶は愛用のエプロンをつけてキッチンに立っていた。小麦粉、卵に無塩バター、牛乳、砂糖、ベーキングパウダー。見るからに焼き菓子の材料だ。

「クッキーでも焼こ」

粉を篩に入れ、無塩バターは柔らかく。今日は暑いからすぐに柔

らかくなるだろう。卵を混ぜて、牛乳少々、バニラエッセンスをちよびっと入れたら、粉と合わせる。生地を寝かせるのは面倒くさいので、今日はドロップクッキー。緩めに作った生地をスプーンですくって、キッチンペーパーを引いた天板の上に落としていく。落としていくからドロップクッキー。ちゃんと丸くなるけれど、やっぱり一つ一つ形が違ふところがお気に入りだった。時間も大して掛からないし。

オーブントースターに入れて、アルミホイルをかけたなら、とりあえず七分。焼き加減をチェックしてから再びアルミをかぶせ、天板の向きを変えて五分。ここらになると、キッチンはバニラの甘ったるい香りで一杯だ。

最後にアルミホイルを外して、焼き色をつけていく。ここからは自分の目が頼りだ。タイマーはとりあえず一分半。じいっと中を見つめながら、綺麗な焼き色のつくタイミングを計る。バニラの香りの向こう側から、香ばしい小麦粉の香り。クッキーの表面が狐色になり始めたところで、すかさずオーブントースターの火を止める。そのまま余熱に任せれば、クッキーの表面は鮮やかな狐色になる。天板を取り出して、クッキーを皿の上に並べながら、晶はひよい一枚焼きたてを手にとって口に入れた。

「あちち」

熱いクッキーがほろりと口の中で崩れる。焼き立てだけの抜群の美味しさを味わえるのは、作った人だけの特権だ。

「はふつ、・・・うん、上出来」

舌を火傷しそうになりつつも、晶は満足げに微笑んだ。時計を見ると、丁度二時になるうとしていた。誰かを呼んで、午後のティータイムとしゃれ込もう。最近買い換えた白い携帯電話を手にとって、晶はいそいそと電話をかけた。

「もしもし、ユウちゃん？クッキー焼いたんだけどさ」

「行く行く」

電話の向うで弾む声。

「んじゃ、三時頃で。よろしくー」
「了解」

快活な返事を残して、電話が切れた。楽しい午後になりそうだな、と晶は思った。

電話相手の祐希とは付き合い始めて三年になる。祐希も近所で一人暮らしをしているので、良くお互いの家を行き来する。明朗快活で話をしていて飽きないから、一緒にいて楽しい。そこに魅力を感じて晶のほうからお付き合いを申し込んだ。その結果、こうして付き合えているわけだから、あの時物怖じしないで本当に良かったと晶は常々思う。

時計に目をやると、三時までには少し時間がある。

こびりついたり固まったりすると後が大変だから、晶は先にキッチンの片づけを済ませることにした。生地を練ったボウルや、ゴムベラ、軽量カップなどを手早く洗って食器かごの中へ放り込んでいく。二十分とかからずに、シンクは綺麗になった。

それから、いよいよ準備だ。

まだ温かいクッキーを綺麗なお皿に並べ、テーブルの上に運んでおく。薬缶で沸かしたお湯をポットに入れ、それもテーブルの上に乗せた。甘いクッキーにはハイビスカスティーかな。ハーブ棚から小ビンを取り出し、食器棚からは透明な小さいティーパーツを取り出して、それもテーブルの上へ。時計を見ると三時の少し手前だった。エプロンを外し、顔に粉が付いていないか洗面所ですっかりチェック。準備は万端だった。

それから十分ほどでチャイムが鳴った。

「はいはい」

玄関のドアを開けると、案の定立っていたのは祐希だった。白いシャツにジーンズと言うラフな格好で、片手にコンビニの袋を下げている。白い袋の中に見えるのは茶色い入れ物。

「ハーゲンダッツ？」

「イエス。良いクッキーには良いアイス。乗つけたら美味しいかと思ってる」

何かのコマースシャルみたいな、おどけた口調で祐希はそう言ってみせて見せた。

「グツジョブ」

「サンキュー。んじゃ、お邪魔」

言いながらひよいと靴を脱いで室内に上がる。キッチンを通り抜けて部屋に入った祐希は、充滿するクッキーの香りに一つ深呼吸して、いそいそとテーブルに近づき、そのままフローリングの床に腰をおろした。

「座布団使つてよ」

玄関の鍵をかけ、後から部屋に入ってきた晶は、直に座る祐希を見てそう言った。

「別に平気だけど」

言いながら、視線は既にクッキーのほうを向いたままだ。ため息を一つついて晶も腰掛けた。

小瓶の中から茶さじで三杯のハイビスカスをティーポットに入れ、ポットからお湯を注ぐ。中に入っているハイビスカスティーの花が踊って、お湯が見る間に赤く色づいた。

「すっぱかったら蜂蜜あるから」

「クッキーが甘そうだから平気だと思うよ」

二人のカップに赤いお茶が注がれて、午後のティータイムの始まり、始まり。早速祐希はクッキーを一つ。

「うん、美味しい」

「それは何より」

晶も一口。さくつとした歯ざわりのクッキーは、焼きたてのときと違った味で、また美味しい。今日のは上出来だった。

「晶は男の子なのに、こういうの上手だね」

「好きだからね。それよりユウちゃん、女の子は腰を冷やさないほ

うが いいよ。座布団使いなって」

「平気だもーん」

「相変わらずなんだから」

笑いあう二人。

ある晴れた日の休日の午後、とにかく平和だった。

了

晶と祐希の午後

(後書き)

叙述トリック。

そう呼ぶのもおこがましいかんにで。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5500c/>

晶と祐希の午後

2009年3月24日10時49分発行